2025年度

学校評価報告

（自己評価、学校関係者評価）

学校法人 RWF グループ

四国中央医療福祉総合学院

自己評価について

１．自己評価実施方法

学院長、事務局長、教務部長、各学科より選任された教員及び職員の代表で構成される自己点検評価委員会にて、評価項目の設定及び点検・評価を行う。

２．評価について

自己評価基準は、「S：十分に達成している」、「A：達成している」、「B：達成がやや不十分である」、「C：達成が不十分である」の４段階の評価として明記し、評価項目に対しての解説を明記する。

３．自己評価の項目

自己評価の項目は以下に示す10項目を大項目とし、大項目ごとに小評価項目を設定する。この評価項目については「専修学校における学校評価ガイドライン」（平成25年3月文部科学省生涯学習政策局）を参考とした。

【評価項目】

(1) 教育理念・目標　(2) 学校運営　(3) 教育活動　(4) 学修成果
(5) 学生支援　(6) 教育環境　(7) 学生の受け入れ募集　(8) 財務
(9) 法令等の遵守　(10) 社会・地域貢献

４．自己点検・評価の対象期間

2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの期間とする。

学校関係者評価

学校関係者評価委員　（敬称略）

①	愛媛県立川之江高等学校長	松木　義明
②	愛媛県立三島高等学校長	宮内　俊洋
③	愛媛県立土居高等学校長	山中　達也
④	四国中央市教育長	東　誠
⑤	元四国中央市教育長	野村　勝廣
⑥	元中学校校長	参鍋　正照
⑦	四国中央医療福祉総合学院後援会会長	藤田　博文
⑧	四国中央医療福祉総合学院　卒業生	星川　凛太

５．評価結果の検証・分析

（今年度の良い点、悪い点、改善点、改善方法及び提案等を評価し、評価理由等を記載する。）

（１）教育理念・目的・人材育成像

小評価項目	評価
①理念・目的・育成人材像は定められているか	S
②学校における職業教育の特色はなにか	S
③社会のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか	S

■各評価項目解説

①本学院の教育方針として、開学より、「将来を見据えた人材育成」「即戦力として期待される人材育成」「自由な発想と責任感を併せ持つ心豊かなエキスパートの育成」を掲げている。また、ディプロマポリシー（専門士授与方針）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）等においても、HP や学生便覧に掲載している。

②本学院では、開学から「従来の常識にとらわれない自由発想の学び」「ベッドサイドに立った一貫した医学教育」「よく学び、よく遊ぶ」「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護師・社会福祉士・精神保健福祉士とのチーム医療」というモットーを掲げている。そして、将来、チーム医療の現場で活躍できる高い実践力を持つ医療人を目指し人材育成をしている。なかでも、「よく学び、よく遊ぶ」は本学院の大きな特色であり、教育の根幹である。

③超高齢化社会を迎えている現在、それを取り巻く社会構造の変化とともに医療や福祉の分野も大きく変貌してきている。疾病構造も大きく変化し、癌、心疾患の増加や高齢化に伴う脳血管障害の増加、あるいは生活習慣病からくる廃用症候群、そして認知症の増加などの対応に迫られている。また、福祉分野においても高齢化に伴って医療と福祉が一体となったシームレスな連携が重要となっている。このような状況の中、リハビリ、看護を担うエキスパートの緊密な連携が今後とも一層大切となっている。さらに、近年では、健康づくり・疾病等の予防への取組みも重要だとされており、本学院においても、昨年度に引き続き予防医学等の教育内容をさらに強化していく。

学校関係者評価

・次代をしっかり見据えた教育理念・方針のもと、指導・人材育成が行われていることが伺える。人が人に関わる職業においては、専門技術の習得、専門スキルの向上とともに、人間性（心、モラル）を高めることも重要であると考える。設けられた学びの場に加え、「よく学び、よく遊び」「よく人と関わる」場を持つことで、将来に生かされる人間性豊かな学生が育つと思う。
・国家試験等において、十分に成果を上げていることは評価できる。
・卒業生による在校生へのアドバイスや、卒業後に専門職として実践していく上での成果や課題を把握し、それらを在校生への指導に生かすことも大切ではないだろうか。
・各学科においてすべての事柄に精通していることはもちろんだが、さらに分化し、エキスパートの育成という観点があってもよいのではないか。
・「よく学び、よく遊ぶ」のモットーの通り、勉強する時は勉学に集中し、勉学以外の場面では、担任・副担任の先生方が遊びの面でイベント（クラスでの集会、食事会、釣りなど）を企画してくださり、担任と生徒の交流が図られていると思う。また、そのことによって、生徒のモチベーション向上にもつながっていると思う。

【今後の取組み】

・専門技術の習得はもちろんのこと、人が人に関わる職業において最も重要となる人間性（心、モラル）の育成にも力を入れている。今後はさらに多角的な学びの場を提供できるよう、検討を進めていきたい。具体的には、さらなる地域との連携なども視野に入れ、将来に生かされる豊かな人間性を育む教育を推進していきたい。
・卒業生との連携については、卒業生は、本学院の教育成果を示す何よりの証であり、貴重な学びの源でもある。今後はさらに積極的に卒業生との連携を強化し、彼らの経験や専門知識を在校生の指導に還元できるような仕組みづくりを進めていきたい。

（２）学校運営

小評価項目	評価
①目的等に沿った運営方針が策定されているか	S
②事業計画に沿った運営方針が策定されているか	S
③運営組織や意思決定機能は規則等において明確にされているか	S
④人事、給与に関する制度は整備されているか	S
⑤情報システム化等による業務の効率化が図られているか	S

■各評価項目解説

①前年度（3 月）に各学科長より各学科の目的に沿った方針が学科長会議、運営会議を経て理事会に提出され、理事会での承認をいただいて次年度（2025 年度）の事業計画を策定している。

②理事会の承認を得た事業計画に基づき、運営方針が策定されている。

③運営組織（理事会）や意思決定機能（運営会議）等は、規則で明確にされている。

④人事（就業規則)、給与（賃金規定）に関する制度が整備されている。

⑤昨年度に引き続き Microsoft Teams(マイクロソフトチームズ)を使用し、教職員への周知事項や決定事項など情報システムの効率化に取り組んだ。

学校関係者評価

・組織的な学校運営が行われていることが伺える。今後、さらなる改善の余地があるとすれば、情報システム化などを通じて、業務の効率化を積極的に進めていただきたい。

【今後の取組み】

・情報システム化による業務効率化は、本学院が取り組むべき重要な課題であると認識している。現在、学内における情報共有のさらなる円滑化や、教職員の事務負担軽減を目指し、新たなシステムの導入や既存システムの改修を検討していきたい。例えば、学生の成績管理、出欠管理等をシステム化することで、教職員がより教育活動に注力できる環境を整備していきたい。

（３）教育活動

小評価項目	評価
①教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針等が策定されているか	S
②学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか	S
③関連分野の企業・関係施設等・業界団体等との連携により、カリキュラムの作成・見直しが行われているか	S
④関連分野における実践的な職業教育が体系的に位置付けられているか	S
⑤授業評価の実施、評価体制はあるか	A
⑥職業に関する外部関係者からの評価を取り入れているか	S
⑦成績評価・単位認定の基準は明確になっているか	S
⑧資格試験の指導体制、カリキュラムの中での体系的な位置付けはあるか	S
⑨人材教育目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保しているか	S

■各評価項目解説

①ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーに沿って、授業は概ねシラバス通りに実施できた。また、初年次教育ではソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上に向けた取り組みを行っている。また、本学院のモットーである「よく学び、よく遊ぶ」を教育の中に組み入れ実践している。

②理学・作業療法学科においては 2020 年度、看護学科においては 2022 年度から新カリキュラムでの体制となっている。また、言語聴覚学科においては、2025 年度より新カリキュラムになっている。今後はカリキュラムツリー・カリキュラムマップやアセスメントポリシーを HP 上で掲げていく。（2025 年度より本学院 HP に公表している）

③学外実習における実習指導者との連絡会議等を設けており、今の時代に合った学生の実習方法や指導方法について随時見直しを行っている。

④4 学科、それぞれの専門性における学外実習を設けており、1 学年～3 学年までディプロマポリシー、カリキュラムポリシーに基づいて体系的に位置付けしている。

⑤授業評価においては、各学科学科長により、評価結果を基に、振り返りを行い、教授方法の改善に努めている。2025 年度には学生アンケートを導入予定である。

⑥学外実習において、現場の実習指導者の評価を取り入れている。

⑦成績評価や単位認定においては明確な基準を設け、運営会議で協議し判定をしている。

⑧国家資格の取得のために、各学科、国家試験の内容を意識した授業づくりやカリキュラム外での学習支援を行っている。また、3 年次の国家試験対策では担任・副担任を中心にグループワークや個別指導、そして、成績低迷者においては、補習等も実施している。

⑨経験年数が充分にある教員を確保しており、講義では、座学だけではなく実技や演習等も実施しながら行っている。また、教科書・参考書のみで講義を行うのではなく、実際の医療現場の内容も取り入れ、学生の当事者意識を高めながら教育を実施している。

学校関係者評価

・見学において、国家資格習得という高い目標に向かう学生に対し、個々の学生に寄り添った丁寧な指導が行われていることが伺えた。変化の予測が難しいこれからの時代において、受動的な学びにとどまらず、学生自身が問題に気づき主体的に解決できる力、学生同士の協働による問題解決力や姿勢を育むことが重要であると考える。その点についても、実習前の少人数によるグループ協議に若い先生方が加わり、学生と向き合って実習への意識や技能を高めるための助言がなされていた点は、非常にすばらしいと感じた。

・学生アンケートを年に 2～3 回程度実施するのも有効ではないだろうか。また、高等学校と異なると思うが、保護者にもアンケート調査を実施してみてはどうだろう。アンケートには、意外と本音の意見が書かれていることが多く、今後の改善などにも役立つと思う。

【今後の取組み】

・今後も、主体的な学びと協働性を育むために、様々な実践を通して、学生が自ら課題を発見し、他者と協働しながら解決していく力を養えるよう、教育内容のさらなる充実を図っていきたい。

・保護者へのアンケート調査については、大変貴重なご意見として受け止めたい。保護者からの視点は、学生の学びや学校生活を多角的に捉える上で非常に有益であり、今後の学校運営の改善に繋がる多くの「本音の意見」をいただけることが期待できると考えるため、検討していきたい。

（4）学修成果

小評価項目	評価
①就職率の向上が図られているか	S
②資格取得率の向上が図られているか	S
③退学率の低減が図られているか	A
④卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	A

■各評価項目解説

①2024 年度の就職率については 4 学科 100％を達成できた。しかし、近年の求人状況をみると、近い将来、県内において就職先が少しずつ減少していくことも予想されるため、福祉分野等を含めた就職先の開拓が必要になる。

②2024 年度の国家試験新卒合格率においてリハビリ 3 学科（理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科）は 100％を達成できた。また、作業療法学科と言語聴覚学科は 2 年連続で 100％を達成できた。看護学科は全国平均を上回ることができた。

【直近 3 年間の新卒合格率】（ ）は全国新卒合格率

学科	2024 年度	2023 年度	2022 年度
理学療法学科	100.0％（95.2％）	93.8％（95.2％）	100.0％（94.9％）
作業療法学科	100.0％（92.5％）	100.0％（91.3％）	88.8％（91.3％）
言語聴覚学科	100.0％（87.5％）	100.0％（87.3％）	70.0％（81.6％）
看 護 学 科	96.8％（95.9％）	82.5％（93.2％）	100.0％（95.5％）

③4 学科全体の退学率は、2024 年度 3.1％で昨年度より低減することができた。(2023 年度 4.6％、2022 年度 4.0％、2021 年度 3.4％）退学理由としては、成績低迷や心身の不調によるものが多い。心身に問題を抱える学生や成績低迷者の早期発見・対応をより強化し、さらなる退学者の低減を目指したい。

④学会での発表実績があり認定資格（認定作業療法士など）を取得している。また、理学療法学科 1 名、作業療法学科 2 名、言語聴覚学科 1 名の卒業生が本学院で専任教員として、後進の育成に尽力している。

学校関係者評価

・高い合格率を維持されており素晴らしい。また、卒業生が本学院で専任教員として務められていることは、学生と年齢の近い先生としての親しみや憧れとなり、良い刺激となっているであろう。近年よく耳にする傾向として、反学院に限らず、学力に関係なく途中で挫折したり心身を病んだりする学生が増えているということがある。進学先や職業への選択がどうであったのか、人間関係作りに問題があるのか、たくましさが次かけてきたのか等、様々な要因が想像される中、学生を預かる学院としては大変な面もあると思うが、継続して早期発見・早期対応をよろしくお願いしたい。
・退学率の低減を図る上で具体的に工夫している点を教えていただきたい。
・言語聴覚学科は、全体の人数が少ないので、１人や２人でも率になると大きく変化することになる。
・全体として概ね成果を達成していると言える。

【今後の取組み】

・国家試験合格率においては、学生たちの努力と、教職員一丸となった熱心な指導の賜物と認識している。来年は 4 学科新卒合格率 100％を目指して、国家試験対策に取り組んでいきたい。
・退学率の低減については、特に、学生のわずかな変化にも気づけるよう、教職員間の情報共有を密にし、連携を強化することで、一人ひとりの学生に寄り添ったサポート体制を強化していきたい。また、さらなる強化として、「入学前の丁寧な説明とミスマッチの防止」「入学直後のサポート」「個別指導と学習サポート」「担任によるきめ細やかなサポート」「相談しやすい環境づくり」等、検討していきたい。

（5）学生支援

小評価項目	評価
①進路・就職に関する支援体制は整備されているか	S
②学生相談に関する体制は整備されているか	S
③学生の経済的側面に対する支援体制は整備されているか	S
④学生の健康管理を担う組織体制はあるか	S
⑤学生の生活環境への支援は行われているか	S
⑥保護者と適切に連携しているか	S
⑦卒業生への支援体制はあるか	S

■各評価項目解説

①各学科で学科長や担任が中心となり進路相談を行いながら、履歴書作成方法、面接マナー指導、模擬面接練習を積極的に実施している。また、図書室等に求人情報コーナーを設置し、県内外に分けてファイルを作成したものをいつでも閲覧できるようにしている。求人施設の来校には、各学科の学科長等で対応し、その情報は、担任から学生へ周知するようにしている。

②定期的な学生面談、それ以外においても常時相談ができる体制を整えており、教員間での情報共有も同時に行っている。また、学生相談室を設置し、担任・副担任に相談しづらい内容にも対応している。

③昨年度同様に新入学生において市内在住の学生は市から入学金 15 万円の補助金をいただいた。さらに、2024 年度の入学生から市外から四国中央市内に転入された学生においても入学金 15 万円の補助金をいただいた。その他、社会人には「一般教育訓練給付金」、作業療法学科・言語聴覚学科・看護学科においては、「専門実践教育訓練給付金」の受給体制も整えている。また、学院独自の学生アシスト制度として、在校生特待生制度、大学卒業者支援制度、家族優遇制度を設けて補助している。

④健康管理においては年に 1 回定期健康診断を全学生に実施している。検査結果において、異常値が確認された際は、学生・保護者に相談したうえで、再受診を促している。また、学生食堂のメニューとして健康管理を意識した定食をリーズナブルな価格で提供している。

⑤生活環境への支援としては、学院専用ワンルームマンションを設けている。また、平日においては伊予三島駅と本学院までのシャトルバスを朝 1 回、夕方 3 回、運行している。敷地内には自家用車の通学者のための有料駐車場（138 台）を設けている。

⑥入学時に保護者説明会を実施し、学校の教育方針や成績判定方法、進級判定や卒業判定の基準を理解してもらっている。学生の出席状況や生活態度等に問題がある場合は、こまめに保護者に連絡をし、情報共有を行うなどの連携を図っている。また、成績低迷者においても、定期試験結果等を保護者に連絡している。さらには、1 年生の夏に三者面談を設けて、学校生活の様子を伝えたり、自宅での様子をヒアリングし、今後の学生指導に活かしている。2・3 年生においても随時、保護者との面談を行っている。

⑦就職先での仕事の悩みや転職等の相談にも対応している。また、国家試験が不合格であった者に対しては、本学院に通って学ぶ制度（科目履修生制度）を設けており、通うことが難しい卒業生には課題の送付や模擬試験等への参加を促すよう連絡を取っている。

学校関係者評価

- 入学時の丁寧な説明や、生徒に寄り添った対応は、保護者の学院に対する信頼を築き、学生の勉学への意識向上につながると考える。また、卒業生に対しても丁寧な支援を継続していただいており、有難く思う。
- 図書室などで、学生自身がいつでも情報収集できる環境が整っており、また、担任の先生を中心に丁寧な相談対応をしていただいていることをありがたく感じている。
- 勉強以外の面でも、クラスの雰囲気や人間関係などについて、優しく相談に乗っていただいている。
- 食堂があり、いつも利用させていただいていた。厨房の方々も活気があり、心地よい雰囲気である。

【今後の取組み】

- 今後も学生が安心して学びに集中できるよう、入学前からきめ細やかなサポートを心がけていきたい。また、保護者との信頼関係を築くことは、学生の成長を支える上で不可欠であるため、強く認識していきたい。

（６）教育環境

小評価項目	評価
①施設・整備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備しているか	S
②学内外の実習施設、インターンシップ、海外研修の場等について十分な教育体制を整備しているか	S
③防災に対する体制は整備しているか	S

■各評価項目解説

①関係法令において必置と定められた施設･設備･教育機器のほか、教育上必要な施設･設備･教育機器等も整備している。本部棟講堂・視聴覚室の照明を LED 化し、過ごしやすい学習環境の整備を行った。インターネット環境(全教室 Wi-Fi 等)の整備はできており、必要に応じて遠隔授業(オンライン等)も実施している。施設･設備･教育機器等の具備状況については、その都度確認し、教育上、必要な物品等においては、修繕可能な物品は修繕し、修繕不可能なものは随時、購入している。

②4 学科とも学外実習施設においては、医療機関、介護施設等おいて実習が行われている。また、臨床実習指導者講習会を受講した指導者に指導していただいている。また、その中で、学生に不利益が生じないように密な連絡を図っている。

③エレベーターや防災関係設備･管理を行っており､毎年 10 月に消防署の立ち合いのもと消防訓練を行っている。また、シェイクアウトえひめの防災訓練にも参加している。学校内における不慮の事故や災害に備えて、学生保険に加入している。AED を設置し万一の事態に備えている。

学校関係者評価

・防災については、学校現場や職場においても最重要課題として取り組んでいく必要がある。そこで培われた防災意識は、将来、人や命を守る立場になった際に必ず生かされるものと考える。あわせて、近年の気候変動による熱中症への対応として、空調設備の管理についてもご配慮いただきたい。

【今後の取組み】

・防災については学校運営における最重要課題の一つであり、学生が将来、医療・福祉の現場で人や命を守る専門職として活躍する上で、不可欠な知識だと認識している。今後も、地域の防災機関や専門家との連携を強化し、より実践的な防災教育を提供できるよう、内容の充実を図っていきたい。

・本学院ではすべての教室、実習室、演習室に空調設備を完備しており、室温管理を徹底している。こまめな空調の稼働状況確認やフィルター清掃を行い、常に快適な学習環境を提供できるよう努めている。近年、夏季の気温上昇は顕著であり、熱中症対策は学生の健康と安全を確保する上で非常に重要であると認識しており、必要に応じて授業中や休憩時間に水分補給を促すなど、学生への注意喚起も行っている。気候変動による影響を注視し、学生が安心して学べる教育環境の維持・向上に努めていきたい。

（７）学生の受入れ募集

小評価項目	評価
①学生募集活動は適正に行われているか	S
②学生募集活動において、資格取得・就職状況等の情報は正確に伝えられているか	S
③学生納付金は妥当なものになっているか	S

■各評価項目解説

①教職員による学校訪問やガイダンス、オープンキャンパス、SNS の発信等、学校の広報活動を積極的に行っている。近年、入学者数減少のため、本学院の魅力を伝える更なる工夫と努力、広域に募集活動の必要がある。

②就職状況はパンフレットに記載している。国の修学支援制度についても、ホームページやパンフレット等で告知している。

③入学金、授業料及び実習費は、同種の専修学校の設定額に鑑み、適切に定めており、妥当である。

学校関係者評価

・現在は、学校が学生を「選ぶ」時代から、学生に「選ばれる」時代へと変化している。学生や保護者が「あの学校に通ってみたい」「通わせたい」と思えるように、学院の魅力、市からの修学支援補助制度、学生への手厚いサポートなどについて、適切な場や方法を通じて広く周知していただけることを期待している。例えば、学生自身が学院の魅力や誇りをアピールする取り組みも非常に印象的であると考える。市内 3 高校のキャリア教育の場などで活用できれば、より効果的かもしれない。また、広域への募集活動もますます重要になってくると思われる。

・学院の魅力については、ホームページや SNS を通じて十分に伝えられていると思う。また、最近では芸能人の方々をお招きすることで、より広範な地域への認知向上にもつながっているように感じる。

【今後の取組み】

・四国中央市で唯一の医療系専門学校として地域医療を支える人材の確保が大切である。今後、さらに少子化が進行し入学者の確保が難しくなってくることは間違いないため市内・県内だけではなく、県外からの入学生を増やすための広報活動も大切であると認識している。近年の進路の選択肢が多様化する中で、「選ばれる学校」を目指し教育活動と広報活動の充実を図っていきたい。

（８）財務

小評価項目	評価
①中長期的に学校の財務基盤は安定しているか	A
②予算・収支計画は有効かつ妥当なものになっているか	A
③会計監査が適正に行われているか	S
④財務情報公開の体制準備はできているか	A

■各評価項目解説

①長期借入金等の負債などを返済できる資産は保有できているものの、ここ数年学生生徒等納付金が減少しており注意を要する。

②計画的な予算執行をする努力をしているものの、電気料金の値上げなどによる経常的な経費が増高するなど十分な効果を得られていない。まだまだ教職員の認識を高め努力していく必要がある。

③公認会計士（外部監査）による監査及び監事監査（内部監査）を実施しており 2 重のチェックを行うことができている。

④求められれば財務情報公開できる体制となっている。

学校関係者評価

・市による補助制度は、近年大幅に拡充されてきたと思われる。他市における優れた事例があれば、ぜひ参考にしていただきたい。財務面については、教職員の認識がどうしても甘くなりがちな傾向があるため、教職員自身が課題意識を持てるような機会や仕組みの工夫が必要であると考える。

【今後の取組み】

・市の補助制度の拡充は、学生の修学を支援し、本学院の教育活動を安定的に継続する上で大変重要な要素であると認識している。
・ご意見をいただいた他市の優れた事例につきましては、情報収集に努め、より効果的な制度活用や新たな支援策の可能性を模索していきたい。
・今後より一層、教職員一人ひとりがコスト意識を持ち、効率的な学校運営に参画することの重要性を認識していけるように財務状況に対する課題意識を共有し、学校全体の運営効率を高められるよう、具体的な改善策を講じていきたい。

（９）法令等の遵守

小評価項目	評価
①法令、設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	S
②個人情報に関しその保護のための対策が執られているか	S
③自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	A
④自己評価結果を公表しているか	S

■各評価項目解説

①法令、設置基準等に沿った運営を行っている。

②個人情報の取り扱いについて教員相互で注意をし、相互意識を高めることに努めている。また、学生についても友達同士の個人情報（SNS での取扱い）や実習知り得た個人情報の取扱いについて規定を設け細心の注意を払うよう指導を行っている。

③毎年自己評価を実施し、問題点については学院内で検討し改善に努めているが、達成できない場合もあり今後も達成するための努力が必要である。

④本学院 HP 上で公開している。

学校関係者評価

・評価が単なる評価で終わらないよう、具体的な改善策や実践に結びつけていくことが必要である。全教職員の共通認識のもと、良い点は積極的に共有し、改善点については協働して取り組んでいく姿勢を大切にしていただきたいと考える。
・本校も同様であるが、評議員会などの場において、本音の意見が率直に出せる環境が整っているのであろうか。また、教職員全体で意見や課題を共有し、改善に向けて具体的にどのように取り組んでいくかが非常に重要だと考える。

【今後の取組み】

・ご意見の通り、評価結果を具体的な行動に繋げ、学校全体の質向上に結びつけることが重要であると認識している。今回いただいた評価を含め、様々な評価結果を真摯に受け止め、その内容を教職員間で丁寧に共有していきたい。良い点については、その要因を分析し、他の業務や部署でも展開できるよう積極的に情報共有を進め、また、改善点については、関係部署が連携し、具体的な改善策を策定した上で、PDCA サイクルを回しながら実践に取り組んでいきたい。全教職員が共通認識を持ち、協働して課題解決に当たる姿勢を今後はより一層大切にしていきたい。

（１０）社会貢献・地域貢献

小評価項目	評価
①学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	S
②学生のボランティア活動を奨励・支援しているか	S

■各評価項目解説

①昨年度に引き続き、四国中央市が主催する健康まつりへの参画や個別ケア会議の出席（各リハビリ学科教員 1 名）、障害者認定審査会の委員として理学療法学科学科長が毎月出席している。また、市内 7 校の中学生を対象とした「中学生職場体験」を行い、座学・体験を通してリハビリ・看護のお仕事について理解を深めていただいた。本学院主催で「中高生向け講座～リハビリのお仕事って何だろう？～」（リハビリ学科）や「看護の日～ふれあい看護体験～」（看護学科）を開催し職業の啓蒙活動をしている。その他、リハビリ専門領域の研修会での場所や実技等を行う際の器具を提供している。

②四国中央市の市民ボランティアセンターと連携を取り、ボランティア活動の推奨・支援をしている。教員が市のボランティア市民活動推進協議会の委員となっている。

学校関係者評価

・学生がボランティアとして参加している姿を見かけたことがある。学生にとっては、ボランティア活動を通じて、日常生活や授業では得られない知識や経験を得ることができるだろう。このような体験の積み重ねが、本市への親しみや愛着を醸成し、地元への定住につながることを期待したい。
また、多くの若い学生がこの町で学んでいる姿は、地域活性化にも貢献していると感じる。市報で学食が紹介されたことも、学院の魅力を発信する良い機会となっていた。実際、一般の方々が多数食事に訪れている光景も目にした。

【今後の取組み】

・ボランティア活動は、教室での学びだけでは得られない実践的な経験や、人との繋がり、そして社会の多様性を理解する貴重な機会となる。このような体験の積み重ねが、学生たちの人間的な成長に繋がるだけでなく、市への親しみや愛着を深め、将来的に地元への定住に繋がることを私たちも強く期待している。今後も、地域団体や行政と連携し、学生が参加できるボランティア活動の機会をさらに充実させていきたい。
・学生食堂が地域の方々にもご利用いただけることは、本学院が地域に開かれた存在であることを示す良い機会であり、地域交流の場としても機能していることを大変喜ばしく感じる。これからも、市報や SNS など様々な媒体を通じて、本学院の魅力や活動を積極的に発信し、地域との連携を深めていきたい。

６．まとめ

少子化という大きな波が押し寄せる中、本学院にとって最も重要な課題は、次世代を担う入学生の確保である。この課題を乗り越えるため、学校関係者評価委員の皆様からの貴重なご意見を真摯に受け止め、教職員一丸となって未来を見据えた広報戦略を再構築していきたい。さらに、教育の質を高めるため、社会のニーズに応じたカリキュラム内容の継続的な見直し、教員の人間力と専門スキルのさらなる向上、そして学生一人ひとりに寄り添うサポート体制の強化に、全力を尽くしていきたい。
四国中央市で唯一の医療系専門学校としての使命を胸に「選ばれる学校」を目指し、地域社会とのより強固な連携を築きながら、社会貢献の新たな価値を創造していきたい。